

文明の暴力性について

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任。『渡辺利夫精選著作集 全七巻』(勁草書房)が発刊中。

幕末・維新期、日本が不平等条約を押しつけられた当時、世界は帝国主義時代の真まっ只中ただなかにあった。

この時代にあつて、世界は大きく「文明国」と「未開国」の二つに分けられるというのが欧米人の考え方であつた。輝く光をもつ文明国と、その光がまだ届かず未開のままにおかれている国という二分法である。文明国のみが理性的で道徳的な存在であり、彼らだけが対等な国際関係をもつ国々であり、万国公法が適用されるのは文明国相互のみだと考えられていた。

未開国は非理性的かつ非道徳な存在でしかなかつた。したがつて、文明国は未開国を征服して彼らを「教化きょうか」する必要があるという理屈であつた。文明国たる欧米諸国が未開国に武力をもつて迫り、それを開国させることにまちつたちゆうちよく躊躇がなかつたのは、彼らがそういうイデオロギーをもつていたからである。

アジア諸国のほとんどが未開国であり、日本や清国がわずか「半開国」だと認識されていた程度であつた。

つた。当時の万国公法つまり国際法は、そのような考え方にもとづいてつくられていた。欧米諸国が日本に不平等条約を迫つたのは、要するに日本が彼らと対等な文明国だとはみなされていなかつたからであつた。

文明には「文明性」と「暴力性」の両面があることを主張した福澤諭吉の著作が『文明論之概略』であるが、そのすぐ後に出版された『通俗国権論』はヨーロッパ諸国の暴力的なアジア進出に備えよと主張した著作である。こういふ。

「百巻の万国公法は数門の大砲しに若かず、幾冊の和親条約は一筐いっくきようの弾薬に若かず。大砲弾薬は以て有る道理を主張するの備そなへに非あらずして無き道理を造るの器械かいなり」

軍事力というものは道理を主張するための備えというよりは、逆に存在しない道理を、あえて造り出すための力である。武力とは「無き道理を造るの器械なり」、往時、福澤以外の誰がこんな論説を書いたであらうか。